

次世代ワークショップ「トランスナショナルな子どもたちの教育を考える」報告
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程 矢元貴美

2011年1月29日、大阪大学において2010年度次世代ワークショップ「トランスナショナルな子どもたちの教育を考える」を開催した。本ワークショップはグループワーク中心のプログラムとしたことから、グループワークを効果的に行うために参加人数に定員を設け、約50名が参加した。

国の枠を超えて日本の各地域に暮らす「トランスナショナルな子どもたち」の教育を取り巻く課題を解決するためには、地域の人々を巻き込んで行動することや多角的な視点から考える必要があり、そのためには実践と研究をつなぎ、多様な考えを出し合うことが必要である。本ワークショップでは、就学前・初等・中等教育に携わる実践者・研究者と当事者が集まり、すでに地域で実践されている様々な事例から、地域の人々ができることを考えるとともに、グループワークを通して、どのようなネットワーク構築や協働ができるかを明確化することを目指した。目的は①実践者・当事者・研究者が対話すること、②実践を通して得た知識や経験を共有して互いに実践から学び合うこと、③子どもたちを支える地域づくりに向けた具体的な提言を目指すこと、の3点とした。

本ワークショップ開催の成果としては、多様な立場の参加者が対話し学び合ったこと、実践を共有できる場を中立的な立場で大学が提供できたこと、の2点が挙げられる。日本各地で実践活動に携わる5名の方々に提供していただいた情報を、当事者、実践者、研究者という立場の異なる参加者が各自の経験と結びつけて考え、共に一つのことを作り出そうとしたことは意義深い。同じ実践者でも、普段はあまり対話する機会のない者同士、たとえば日本語教師と地域ボランティアと学校の教師のような参加者が対話できたことも大きな成果である。当事者同士が互いの経験や考えを出し合え、当事者の声が教育に携わる参加者の新しい気づきにつながる貴重な機会ともなった。地域に目を向け、協働に取り組むべきであるという認識を新たにでき、経験豊かな参加者からは、経験の浅い参加者や若い参加者の今後の取り組みを勇気づける温かいコメントをいただいた。会場を変えての情報交換会でも、各参加者の活動を通して感じるやりがいや悩みについて、インフォーマルな場でこそそのざっくばらんな共有やネットワーク形成ができた。

一方、課題としては、午前と午後のプログラムがつながりに欠け、当事者の声が十分に反映されなかったことや、課題を改善するための具体的な提言を行うまでには至らなかったことが挙げられる。これらの課題を踏まえ、今後も各地で同様のワークショップを開催していきたい。本ワークショップにつながる企画としては、大阪府に暮らす多文化な子どもたちの教育に携わる担い手が集まり、課題の解決策を考える「大阪の多文化な子どもの教育を考える担い手連携会議－人材活用と連携」が2011年2月26日に大阪で開催され、活発な議論がなされたことを加えておく。